ディアコニア

295

隣人を愛しつつ しなやかに生きる

牧師　佐藤千郎

イエスは言われた。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積みことになる。それから、わたしに従いなさい。」

マタイによる福音書一九章二一節

平成の時代は、私たちの国が高齢化に向かう時代でした。そして、今年五月に迎えた「令和」は高齢社会の始まりとなりました。そんな時代の空気を反映した言葉の一つが「終活」でしょう。

この言葉は、私が常用して来た辞書にはありません。しかし、今ではこの文字を目にしない日はないと言えるほど、身近な言葉となっています。

この言葉がどのような経緯で造られたか知りませんが、私なりの理解としては、終活とは、「わが人生の終末に向けた活動」を意味し、終末期医療に関する考えや、葬儀、相続、お墓などの準備、さらには来し方を振り返りつつ人生を総括し、希望を抱きつつ天国への旅立ちを整えていくことだと、考えています。

老若男女を問わず死について思いを巡らすことの大切さは、何時の時代も、様々に語られてきました。

中世カトリックの修道院で、修道士が交わしていた挨拶は「メメントモリ」（死を忘れるな・自らの死を覚えよ）だったそうです。物の本によると、「メメントモリ」は古代ローマまで遡ることの出来る言葉で、戦いに勝利し凱旋パレードが行われる際に、将軍の後ろに立つ使用人が、この言葉を発していたとのこと。ひと時の勝利に酔いしれて自我を失うことのないよう、将軍の身の引き締めを気遣う所作だったのでしょう。

我が国の古典に記された「生者必滅、会者定離」との言葉を待つまでもなく、生ける者はすべて、生と区別することは出来るが、分離することの出来ない事柄としての死と隣り合って今も暮しています。人は、人生の節々で、否応なく死と向き合わざるを得ないのです。

ここに、ひとりの、真面目な富める青年がいました。彼は主イエスに近寄り「先生、永遠の命を得るためには、どんな善いことをすればよいでしょうか」と尋ねます。どこかで人生の終わりへの不安を感じていたのでしょう。

主イエスの答えは、ユダヤ人の誰もが知っている掟、即ち「殺すな、盗むな、偽証するな、父と母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。」という律法の遵守でした。

青年は言います、「そういうことはみな守ってきました。まだ何か欠けているのでしょうか。」と。

この言葉からは、当時のユダヤ人社会にあって、アブラハムを先祖とするイスラエル民族の伝統を受け継ぎ、誰よりも

律法を遵守し、礼儀正しく、慈悲深い信仰に生きている者の、自信に満ちた人間の姿が読み取れます。しかし、そこには充足感も安心感もなく、心満たされることのない心模様も、伝わってきます。

年齢に関係なく、自信と不安が交差する日常からの問いがあります。それが、「永遠の命を得るには、どんな善いことをすれば良いのでしょうか。」という青年の問いでした。そして、問答後の主イエスの最後の言葉が、冒頭の聖句です。

主イエスのこの言葉には、曖昧模糊も意味不明もありません。「行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施すこと」と「主イエスに従うこと」です。

それは、「隣人」の所へ出かけて行き、寄り添い、「隣人」に軸足を置いた人生を生きることへの勧めと招きの言葉でした。

朝日新聞の「天声人語」に「がんの存在を受けいれましょう。病気やトラブルが全くない人生はありません。完璧でなくていい。楕円形のように少々いびつでいいんです。」という樋野興夫氏（順天堂大学名誉教授で『がん哲学外来』を開設した人）の言葉が紹介されていました。

この天声人語の文章は、冒頭の聖句に思いを巡らせていたわたしに、「神を愛し、隣人を愛する」ことが律法のすべてと語られた（マタイ福音書二二章三四～四〇）主イエスのお言葉と振る舞いを思い起こさせました。そして、主イエスが青年にお話になったその意味は、二つの定点を持つ楕円形のような人生への勧めではないか、と思えてきたのです。

楕円形はまん丸い円に比べて歪（いびつ）です。その形は円にくらべ歪んでおり、外の力が加わって正しい形を失う「ひずみ」が生み出す形です。

しかし、形を変えながらではありますが、二つの定点（信仰生活における神と隣人という二つの中心点）を持つ楕円形に変わりはありません。

主イエスは、一つの中心点を持つ円を目指す熱心ではなく、暮らしの中で、神だけでなく、隣人にも軸足を置いて楕円に生きるしなやかな生き方に、永遠の命につながる真の平安が約束されていることを、語っておられるのでしょう。

「終活」と言う言葉にいろんな思いが去来します。特に、隣人と共に在る日常の暮らしは、しばしば、信仰と不信仰に揺れるいびつさに悩まされます。そのいびつな人生のまま終末の時を迎えることも、珍しいことではありません。

主イエスの言葉を聞き、悲しみながら立ち去った青年は、この歪に耐えられなかったのかもしれません。

「信仰に生きる私たちの人生は、いびつな人生で良いではないか、それも、神を愛し、隣人を愛しつつ生きる信仰者の姿だから」と言う、愛の神の眼差しに気づくよう、主イエスは、この青年と真剣に向き合われたのではないでしょうか。

「それから、わたしに従いなさい」との言葉に、そんな温もりのある主イエスのお気持ちを汲み取りながら、冒頭の聖句を、私は心に留めています。

（ベテスダ奉仕女母の家・理事）

施設だより

茂呂塾にて三十年

茂呂塾保育園園長　髙梨美紀

ベテスダに繋がる皆様にまずご挨拶申し上げます。この4月、大沼昭彦先生より園長を引き継ぎました髙梨美紀です。

新体制になりましたが、これからも職員とともに伝統ある茂呂塾の保育の継承と新しい時代にあった保育、そして何より神様から託された一人ひとりの子どもたち、また連なる家庭に寄り添う保育を大切にしていく所存です。どうぞ宜しくお願いいたします。

園長になってまだ3カ月程ですが、私は茂呂塾に入職しましてからこの春で満31年になりました。東洋英和女学院短期大学を卒業してから、一度も辞めることなく、続けてまいりました。全ては神様の計らいと心から思っております。

今回は、茂呂塾箱入り娘の私がこの30年で感じてきた茂呂塾の変遷をこの誌面を借りてお伝えします。

樹木

茂呂塾の園庭は都内23区にしては珍しく広く、木々に恵まれた園かと思います。しかもその木々には、びわ、梅、夏みかん、ぶどう、柿と実がなります。

30年前、庭のイチョウの木には縄梯子がついており、またプラタナスの木も二股に分かれた部分が低く、どちらにもよく子どもが登っていました。しかし今はどの木も、枝一つにさえ手が届かない程大きくなりました。

実のなる木は健在で、なんの手入れもしないのに毎年実をならせてくれます。夏みかんは一時期、実をつけなくなりましたが、昨年あたりからとって食べられるほどなるようになりました。いつも変わらず豊作なのは柿です。子どもが根元あたりを砂遊びで掘るからでしょうか？実をもいで食べるなんて、まさに本当の食育だなあと、いつも感謝です。

園舎

今から24年前には乳児クラスの園舎B棟を、6年前には幼児クラスの園舎A棟を改築。それぞれ保育しながらの改築でしたので、相当な工夫と辛抱が必要でした。B棟改築時は、まだ園の西側に「児童団」に使用していた園舎が残っており、そこをリフォームして仮設の保育室としたこと、園庭に仮設の調理室をつくって食事提供を休むことなく続けたことは、懐かしい思い出です。B棟には、それまでなかった2階の保育室ができ、初めての0歳児保育がスタート。可愛い赤ちゃんがやってきて、職員・子どもたちで大歓迎したことも覚えています。

A棟の改築はB棟改築時より遥かに保育に困難が生じました。A棟は様々な行事を行うメインのホールとしての保育室もありましたし、仮設園舎を園庭いっぱいに建てた関係でとにかくスペースがなく何一つ行うのにも職員みんなで頭をひねったものです。しかしこのことがきっかけで近隣の小学校や高校にまで出向いて場所をお借りしたり、公園を会場にしたり、これまでになかった地域との関係がぐっと広がりました。

完成後、園舎や茂呂塾の保育を保育関

係者や入園希望の方が大勢見学においでになりますが、皆さん口を揃えて、園舎の使い勝手や温かな雰囲気を評価してくださいます。園舎改築は、茂呂塾らしい環境を作れた出来事だったと思います。

職員

今年は働き方改革ということで、どの企業も事業所も、いろいろ変わるところがあるかと思いますが、茂呂塾もこの30年でずいぶんと体制や働き方が変わりました。私が入職した当初の職員は、常勤が大沼和子園長先生を筆頭に11名、非常勤が1名の計12名でした。24年前に0歳児保育を始めますと、一気に職員数が増えました。保育時間が30分長くなったこともあるかと思います。今では常勤が19名、非常勤が13名の計32名。3倍近く職員が増えました。かなり大所帯です。昔は鶴の一声でなんでも事が回りましたが、3倍ともなると連携するには相当の工夫が必要です。しかしそこは茂呂塾の最も得意なところとしています。

19年前、私が茂呂塾での育児休業取得者第1号になりました。当時の園長であった大宮洋子先生に「園でバックアップするから是非育休を取得して頑張ってほしい」と言っていただき、また周りの職員の温かい理解もあって、大変でしたが子育てをしながらここまでやってこられました。

入職当時は結婚か妊娠での退職が普通でしたが、私が取得して後、常勤職員の殆どが育休を取得。ここで3回取得した職員もおり、子どもを育てながら働くことは、普通のことになりました。

また子育て中の職員が多いので、助け合って働く体制ができており、女性として働きやすい職場と自負しております。

また10年前に男性保育者が入職したことも記しておきます。男性保育者は今や当たり前のことですが、入職したのはこの茂呂塾の卒園生で、茂呂塾をこよなく愛し、戻ってきました。男性一人は、いろいろ大変だったかと思いますが、経験を積んで成長し、育児を担うお父さんたちにとって、良い存在になっています。

本来はもっともっといろいろな変化がありましたが、誌面の関係でこれくらいにしておきます。

時代とともに変わることも多くありましたが、全く変わらないこともあります。それはこの環境を最大限に生かした保育と、深津文雄先生が「もっともよいもの、ほんものを」と仰られたことを保育の中で丁寧にしていること、また職員一人ひとりが、法人の精神のひとつである「私たちにもできること」を、心して努めていることです。

茂呂塾保育園を皆様のお祈りのうちにお覚えいただければうれしいです。また今日も明日も、10年20年と茂呂塾物語を紡いでまいりたいと思います。

礼拝と音楽72号（92年2月）

「日々の聖句」について

深津文雄

「ベテスダ奉仕女母の家」で、「日々の聖句」を出すようになってから、もう35年（注19年版で62年）になります。

「本」というほどのものではありません。まことに小さな、うすっぺらな、変り型の手帳にすぎないのですが、中身が変わりますので、毎年刷らねばなりません。その準備だけでも、原本からいうと、ゆうに4年の歳月を費やしているのです。

以前にも、この仕事を手がけたものは幾たりかありましたが、続きませんでした。本屋も採算がとれないと、投げてしまったのです。

ところが、この本には、ふしぎな習慣性がありまして、いちど使いはじめるとやめられないのです。採算という点からだけいえば、とっくにやめていたはずですが、需要の切実さからいうと、やめるわけにもいかず、赤字を覚悟で続けてきたのです。

まず奉仕女の朝夕の聖想のためには、なくてはならぬものですし、奉仕女のために日ごと祈っていてくださる祈りの友にも贈りたいし、幾つかもっている施設の職員にも、またその家族たちにも……ということになりますと、ついつい何千冊ものものが出てしまうのです。

もうやめようとしてもやめられませんし、やめようと思ったこともありませんから、天地とともに続くのでしょう。

どこがそんなに便利なのか――といいますと、まず日ごとに新しいということです。朝ごとに戴く、その日の聖句が、まったく思いがけないのです。こんな言葉が、聖書のどこにあったのだろうと、専門のはずの私が恥しくなるほどです。

おそらく、地上のなんびとも、このまねはできないと思います。じつは無心の機械がやったことなのです。

「籤（ローズング）」という機械的偶然が、いかにも意味ありげに、われわれの前に立ちはだかる。それは、人間の配慮を拒否した断言として、われわれの前に突き付けられるのです。それもことごとくが、２０００年以上も古い、ヘブライ民族の知恵の形で……。

無意味と言えば、これほど無意味なことはありますまい。ところが、そう感じるのは、まだ、あなたが既成の常識に捕えられているからなのです。朝ごとに新しくなりたいと思わないからなのです。

朝ごとに、思いがけない聖句を突き付けられ、それを瞑想することの恵みは、計り知れないものがあるのです。しかも、おなじ一つの聖句に、世界中の数知れぬ兄弟姉妹が、いつしかつながっているというのですから、まったく壮観です。

ことの起こりは、いまから263年ほど遡ります。今は統合された、ドイツの東南隅に、ベァテルスドルフという小さな村があります。そこのお城の若い殿様が、受け入れた隣国からの難民と、歌を歌って別れようとする、ある夕べのことでした。厚い大きな紙に、自分で書いた聖句を渡して言ったのです――「この言葉を、

あした一日の、われわれの生きる力にしよう」と。

そこには、「かくも主は我らを愛された。われらはこれに何をむくいよう」という意味のことばがあったというのです。これは、聖書の中には見つからない、聖歌の一節か何かなのですが、その翌日からは、旧約聖書からの一句を毎日選んで渡したのです。それを兄弟たちは携えて、村中を称えて回ったのです。それがいつしか一週間分、一月分と、前もって準備されるようになって、とうとう1731年からは、一年分まとめて印刷されるようになりました。「アイン・グーター・ムート（上機嫌）」という題をつけて……。

それだけきいて。これは真似のできないことだと感心しました。驚くべき学識というか勤勉というか、真剣な生き方です。どうしてそんなことが、まだ30歳にもならない一人の貴族にできたのでしょう。それには深いわけがあるのです。

ニコラウス・ルードウィヒ・フォン・ツィンツェンドルフ（1700−1760）伯爵は、生まれて間もなく、父を失っています。母も再婚してしまいましたので、一人さびしく、母方の祖母に育てられたのですが、この女性が、有名な敬虔派の開祖フィリップ・ヤコブス・シュペーナーと親しい、たいへん信仰深い人でした。少年ツィンツェンドルフは、やがて敬虔派の中心地ハルレに送られて、そこで有名な牧師、アウグスト・ヘルマン・フランケの寄宿学校に預けられ、そこからウィテンベルグ大学で法学を専攻するのですが、すでにその段階で、友人たち7人で、「エクレスィオラ（小教会）」という群れをつくっているのです。

それから、アムステルダム、パリー、シュトラスブルグ、バーゼル、ツューリヒなどに遊学し、教派をこえた良い交わりを経験し、帰ってドレスデンの宮廷法務官になり、友人の妹エルドムート・ドロアテ・フォン・ロイスと結婚したのですが、すでにこの時代に、「週の聖句」というものを刊行しています。

そこへ転がり込んできたモラヴィアの難民というのが、ただものではなかった。30年もつづいた宗教戦争で、もうことごとく死に絶えたはずの、改革者フス（1370〜1415）の残党が、ボヘミアの山奥にかくれて共同生活をしていたのですが、きびしい弾圧にたえかねて、クリスティアン・ダヴィド（1690〜1751）という大工を先にたてて、ザクセン国に移住して来たのです。

これをみて心うごかした若い裕福な伯爵は、自分の持物すべてを与えて、「ヘルンフート（主の守り）」という村をつくり、一緒に生活し、ついには彼らの司教におされたのです。が、秩序を破ったという理由で、ザクセンから追放され、西インド諸島から、米国各地、スイス、リトアニア、オランダ、英国と、集団で巡礼し、その先々にコロニーを作りました。メソジスト教会の開祖、ジョン・ウェスレーなども、この派の集会に出て回心を経験しました。その話はあまりにも有名です。また、近代神学の開祖、フリードリヒ・シュライヤマッハー（1768〜1834）なども、父親の代からの兄弟団々員であり、この派の神学校出身です。

いま、この「ヘルンフート兄弟団」というものは、世界中いたるところ、人の行かない辺鄙な場所に宣教師をおくり、165の教会と7万人ほどの会員をもっているといいますが、彼らは日ごと与えられる一つの聖句にもとづいて聖想を守っているのです。1728年5月3日以来、一日もかかさずに……。

そして、その聖句集は、27（㊟19年版では50）をこえる国語に毎年翻訳され、何百万人もの人に使われているのです。その中に、思いがけない指導者たちの名前まで含まれています。

この素晴らしい話を初めて私に聞かせてくださったのは、リーマル・ヘンニッヒ（1909～1954）博士でありました。彼はハンブルグの有名な「ラウヘスハウス」の施設長の子に生れ、ツューリヒ大学で、「ツィンツェンドルフに於ける教会観」という論文をまとめ、ドイツ東亜伝道会から派遣されて日本へきて、富坂に住んだのですが、この国に毎朝聖書を読む習慣が乏しいことを嘆き、とうとう1939年版からヘルンフート兄弟団の「ローズンゲン」を日本語にして出したのです。

出版・教文館
序文・深津文雄

私はそれを手にして、ヨーロッパの教会の伝統の深さに脱帽しました。ことに、そこで初めて接した「教会歴」というもののきめの細やかさには感心しました。教会歴がカトリックや聖公会にあることは、うすうす聞いていましたが、プロテスタントでは使ってはならないもののように教えこまれていたからです。ところが、それは、まったく逆さまで、むしろ、プロテスタントの側でこそ、熱心に研究され、熱心に使われていることを知ったのです。

それ以来、私は教会歴のリズムに乗って教会を牧し、友達にも薦めてきました。

教会歴というのは、ようするに、この世の生活に暦があるように、主の教会にも、暦があらねばならぬということなのです。もちろん、個々の教会で、それぞれの予定はありますでしょうが、教団全体として、世界の教会と共通なものがなければならないと思っていたのですが、それが使徒教父の昔から形成されてきていたことを知りました。

教会歴とは、古くからの「主日礼拝朗読箇所（ペリコーペ）」の形づくる波形のことです。

☆まず、主の来臨にそなえる「**降臨節**」4週から始まり、年末年始をまたぐ「**降誕節**」12夜がつづきます。元旦も「命名祭」にすぎません。

☆1月6日の「顕現祭」と、これにつづく1～6週間（年によって変わる）は、主の栄光をあおぐ「**顕現節**」です。

☆それから、主の十字架にむかって「**受難前節**」3週間と、「**受難節**」6週間の克己がつづきます。「聖木曜」「聖金曜」は、その至聖所です。

☆そして「復活祭」と、これにつづく4週間「新生」「慈悲」「喜べ」「歌え」を「**復活節**」と呼ぶことができます。

☆つづく「祈れ」「昇天」「昇天後」「聖霊

降臨」「三位一体」までを、まとめて「**聖霊節**」とよぶこともできるでしょう。

☆「三位一体後」の27週間には、祭日はありません。この期間を「**教会の半年**」とよんで、宣教、奉仕、救済、審判などに区分する試みもあります。

こういう教会歴は、世界中の教会が、みな一致して守ってきたものですから、それを変える場合には、なるべく全教会の同意がほしいものです。ある群れだけが独走しても、歩調が乱れるだけです。

こういう歴史的なものにそって、代々の説教者たちは、説教をしてきたのですから、それが困難な時に、それを変更して使うことは自由ですが、これを全く知らないということは、どうでしょうか。

実はヘルンフート兄弟団は、ほんらい霊感主義ですから、教会歴には馴じみにくい立場にあったのですが、広い世界に出るようになって、これを呑まねばならなかったのだということです。

そればかりではなく、「教会歴による週日の日課」まで取り入れたのです。これは、ルードルフ・シュピーカーほか36名の典礼学者が集まって、ながい研究討論のすえ、旧新約聖書全体から選んだ週日すべてのための朗読箇所なのです。このシュタウダ出版社から公刊されたものを、同意を得て、ローズンゲンが採用したということは、たいへんな勇気です。おかげで、1年365日が1日ものこさず、教会歴の傘の下に納まった訳です。

毎日の聖句が2つ書いてある、その下に、数字だけで示してある、左のものがそれです。ついでに、その右にあるものは何かと言いますと、オットー・リートミュラーという青年指導者が、1932年から提案した「聖書全巻通読運動表」なのです。よく、新年の初めから、創世記を読み始めるなどということをききますが、それで黙示録までたどりついた話はきいたことがありません。そこを、4年で新約の全体が終わり、8年で旧約のあらましが終わるよう、四季の変化も考慮に入れて、飽きないように工夫したのが、これなのです。まあ、使ってごらんなさい。これなら、なんとか成功したという人は案外いますから……。

しかし、それの出来ない人たちのために、この小冊子は生まれたのです。厚い、重い、旧新約聖書を持ち歩かなくても、この小さなローズンゲン一冊、ポケットに潜ませていれば、まず退屈するということはありません。旧約聖書の隅々から、選び抜かれた一句が、毎朝あなたを待っているのです。

この籤（ローズング）の母体は、1600ちかくの、前もって選ばれた**聖句が入っている箱**なのです。そこから、何年何月何日のためといって抽くのです。

なぜ**旧約聖書**ばかり選ぶのか、これは永い習慣だからです。別に理由はありません。これには、フランケの影響がありはしまいかというのが、私の推測です。というのは、ツィンツェンドルフに大きな影響を与えた、恩師フランケは、ユダヤ人の先生についてヘブル語を学習した旧約学者だったからです。友人を自宅にまねいて、「コレギウム・フィロビブリクム（聖書愛好同志会）」を始めたほどの人ですから、旧約聖書をよけてとおるキリ

スト教会を叱っているのでしょう。

ですから、そのゆえにこそ、「教育の聖句（レーァテキステ）」とよばれるものが、早くから掲げられるようになったのです。毎日のローズングのつぎに掲げられているのがそれです。これは、籤で抽かれたものではありません。その日のローズングによく合うように委員たちが、**新約聖書**のなかから探しだしたものです。

ローズングが難解な時には、これに頼るようにという配慮からだといいますが、私は、これに頼らないことにしています。

また、ドイツには何万という「コラール」があって兄弟団も詩人ぞろいでしたから、毎日のローズングにそえる歌節に不自由しませんでした。原本には、毎日2節ずつ、よく見付けたものだと驚くほど素晴らしい歌が、祈るように解説するように、添えられているのですが、これだけは、訳す時間も才もなく、割愛せざるをえませんでした。

せめて、日本語に訳されて、讃美歌に入っているもののうちから、週に一曲でも……と探してみたのですが、ありませんでした。ブルンナー博士をお迎えしたときにも、歌えるものがなくて、困ったものです。この不名誉を挽回するために、ただいま全力をあげて、「ドイツ聖歌集」を準備していますから、しばらくお待ちください。（㊟92年12月25日「ドイツ聖歌集―古典コラール百選」発行）

日本版の一番良いところは、何といっても、その形です。ドイツの原本は、A6版140頁ですが、日本版はB6変形114頁という手軽さです。私などは、外へ出るとき、聖書を携えないことはあっても、ローズンゲンを手放すことはありません。

つぎに、その割付です。日本版は、1週間ごとの見開きにしていますから、パッと開いて、いつも主日が頭にきます。

その両ページにまたがって、「週の聖句」を欄外の上部にとおし、主日の欄は、倍の面積をとって、そこに教会歴の「福音書」「使徒書」「詩篇」「讃美歌」を数字で揚げておきました。

なお、欄外の余白を、できるだけ広くして、そこへ読者が自由に感想や出来事を書き込めるようにしました。これは、時が経って出して見ると、楽しいものです。

ただひとつ、困っていることは、どの訳を使うかということです。というのも、もともとドイツ語で書いてある一節を、日本訳の同じ節でおきかえても、その霊感は逃げてしまうことがあるのです。そういうときには、原語に近づけるように訳し変える必要があります。長すぎて、入らないときには、削ることもあります。明らかに誤訳であると分かった時には直したくもなります。しかし、それらの改変はいっさい許されないのです。

弱り果てて、独自の訳に帰ろうかと迷っているのです。ドイツ語の原本でさえ、よく見ると、いろいろな訳を使っているということですから……。

何か、よい考えがあったら、教えてください。（ベテスダ奉仕女母の家初代館長　元かにた教会牧師　2000年没）

※「礼拝と音楽」の転載。誌面の都合で、原文を削った部分があります。（文責・塩川）

ゆくまど

三ヴ三多から ひとこと

老いてゆく体は毎日確実に動きにくくなっていくのが気になりますが、誰にでもくること。寝床から起き上がれた事を先づ感謝し、心にかかる方々のことを祈り、今日一日の予定を考えます。動きだしても転ばないように慎重に一歩々々と、動きます。でも週二回、半日づつの体操には、車の送迎のおかげで通えて居ります。感謝です。今年も夏がやってきますが、暑さに負けず皆様もお元気でおすごしください。

真山　知恵子

＊

ベテスダ奉仕女母の家が1962年12月末に落成されてから57年が経過しました。

この建物は玄関のプレートにしるされているように、ドイツのベテスダ姉妹及び、多くの人たちの多大な寄付によるものです。2019年4月29日から屋上の防水工事、玄関北側の軒先部分の塗装工事、先日は井戸水の揚水ポンプの故障と相次ぐ工事のなかで、息苦しい毎日の生活をしております。

細井　陽子

＊

癒されし新樹の光身をつつむ

新樹光命のいぶき給わりぬ

ゆるやかな歩み新樹の香をききぬ

新樹光人のこころを写しけり

行きむ日の新樹ふかく深く吸ふ

植木　道子

＊

この数日、わたしは、長年のお便りなどの整理をしながら、深い感動で胸をあつくしています。いかに、多くの方々の熱く、愛に満ちた祈りと励ましに支えられ、励まされてきたか。しみじみと、改めて心打たれています。

祈りの友の方々、姉妹同士、同労の方たち、クラスメート、見学に来られた方々、そして村人たちからのもの。その一つ一つに、今日まで生かされ、今日も生きる力をいただいていることに感じ入っています。ただ、一方、自らの筆不精を詫び、悔いる思いも。

天羽　道子

＊

小川都代姉は、4月30日、東京を離れ、桜庭歌子姉の入居している館山市相浜のグループホーム「相浜ガーデン」に転居。

二人とも6月生まれなので、いつものレストラン・オーパで、お誕生日のお祝いをしました。桜庭姉は「誕生日のうた」をしっかり歌い、美味しい食事も完食しました。塩川と天良も運転で同行。

賛助金・イースター献金
ありがとうございました

関本郁子　戸田里美　村田充子　今井佳代　酒井忍　大竹雪子　柴山操　池田直子　村松一恵　石井佐　菅宮建吉・泰代　余郷志津子　金城学院大学キリスト教センター　東洋英和女学院中高部宗教委員会　立教女学院小学校　代々木上原教会　松原教会婦人部お仕事会　翠ヶ丘教会　霊南坂教会　田浦教会エレミヤ会　大和キリスト教会支援員会　松井エツ子

3月～6月分（敬称略）

★　理事会

（於　茂呂塾保育園）

第223回理事会　3月23日

【報告】①かにた婦人の村建替事業の件　②法人本部事務局体制の件　③各施設報告【審議】①平成31年度事業計画案並びに予算案　②茂呂塾保育園就業規則等の改定　―いずれの議案も承認議決された。

第224回理事会　6月1日

【報告】①かにた婦人の村建替事業の件　②理事長の本部長兼務の件　③各施設報告【審議】①平成30年度事業報告案並びに決算報告案の件　②監査報告　③理事並びに監事候補者推薦の件　④定時評議員会の件―いずれの議案も承認議決された。

第14回評議員会　6月29日

【報告】①平成30年度事業報告【審議】①理事並びに監事候補者選任の件　②平成30年度計算書類・財産目録承認の件　―いずれの議案も承認議決された。

第225回理事会　6月29日

決議の省略による

【審議】①理事長及び業務執行理事選定　―全理事の同意書及び全監事の確認書により議案は承認議決された。

★　人事

①法人事務局勤務の佐藤元紀は3月31日で退職しました。②監事の宮崎康久は6月29日をもって退任しました。永年の御尽力に感謝いたします。③大沼昭彦理事長は6月1日より本部長兼務となり毎週水・木・金曜日に本部勤務になります。

理事・監事紹介

（任期6月29日より2年）

理事長・大沼昭彦　理事・天羽道子　五十嵐逸美　伊藤瑞男　佐々木清　佐藤千郎　森史子　横田千代子（以上再任）

高梨美紀（新任・茂呂塾保育園園長）

監事・加藤順　山本洋子（以上再任）

★　編集後記

主の大いなる御名を賛美いたします。新しい年度に入りましてからもお寄せ頂いたご支援に心から感謝申し上げます。

今後とも引き続き、皆様の日々の祈りの中でお覚え下さり、益々のご支援を賜りますよう重ねてお願い申しあげます。

2019年7月15日発行（年3回）
発行人　大沼昭彦
編集人　村田英彦
印刷所　㈱印刷センター
発行所
〒178-0061
東京都練馬区大泉学園町7-17-30
社会福祉法人ベテスダ奉仕女母の家
電話　03-3924-2238
https://www.bethesda-dmh.org/
振替口座00190-2-138164